

「小学生の部」

(銀賞)

(小さなキズ)

相原 秀哉
千葉県市川市立新井小学校三年

「わあーい、自転車だー」

ぼくは、うれしくて、うれしくて、ウサギみたいに飛びまわった。ぼく

が、この日をどんなに楽しみにしていたことか。

自転車は持つているんじゃないか？、いいえ。僕がずっと乗っていた自転車は小さすぎたから、近所のように園の子にあげてしまった。それから何日も、自転車はなかった。

そして、今日ようやく、たまたまおこずかいで買いにいけることになった。

ぼくがえらんだ自転車は、五段変速で、つばさのようなドロよけがついている。でも、一番気に入っているのは、大きなかごがついているところ。

ぼくはさっそく自転車にのって、お母さんと買い物にいった。そして、かごの中にもう何も入らないくらい買った物をのせた。「そんなに乗せて大丈夫？」お母さんがいうのを無視して自転車走らせた。

ぼくは、さつきより、すごい早さでこいだ。「転ばないように気を付けるのよ」、「はいはい」。後ろをふりかえると、お母さんは豆つぶくらい小さいところをいた。「おそいなあ」、まるでチーターとカメラがきょううをうしているように気分よかつた。

すると前から「キーッ」という音がした。前を見ると、目の前に自転車が飛びこんできた。「あわわ」あわわてよけたが、バランスをくずして転んでしまった。「いたたた」顔を上げると、男の人とお母さんがいた。

「大丈夫ですか？」男の人がきいてくれた。「大丈夫です。ごめんなさい。」男の人は、安心して言ってしまった。「だからいっただしょ！、ほんとうに大丈夫なの？」お母さんがブツブツ言っていた。

ぼくは、そんなことより、自転車のことが心配で、いそいで自転車をチェックした。(よかつたあ、無事だあ)と思っただけで、いそいで自転車をチェックした。お母さんがブツブツ言っていた。転んでいたかつたことより、

悲しかった。ぼくは、それ以来、転んだことは無い。自転車に乗るたびに「気を付けなよ」と、小さなキズが、ぼくに教えてくれる。